



なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No.42

万葉集から律令時代の暮らしを読み取ろう

貧窮問答歌 山上憶良は何を伝えたかったのか？

『万葉集』(萬葉集)は、飛鳥時代から奈良時代(7世紀後半から8世紀後半)にかけて編まれた現存する日本最古の和歌集である。それには、天皇、貴族から下級役人、防人などさまざまな身分の人たちが詠んだ和歌が約4,500首以上収録されている。

その中の『巻五』に、山上憶良の詠んだ「貧窮問答歌」がある。それは、律令時代の庶民の暮らしを描写している。万葉仮名の雰囲気を読み取りながら、現代語訳¹で、律令時代の身分関係、貴族と庶民の暮らし(住居や食事情)を読み取ろう。

なお、作者の山上憶良は大寶元年(701年)に遣唐使の一員になり、同2年に唐へ渡り、慶雲4年(707年)に帰国した。帰国後、従五位の官位の貴族にまで昇進した。この貧窮問答歌を詠んだのは筑前守(筑紫国の国司)だったと伝えられている。

貧窮問答歌一首 并短歌	
風雜 雨布流欲乃 雨雜 雪布流欲波 為部母奈久 寒之安 禮婆 堅塩乎 取都豆之呂比 糟湯酒 宇知須く呂比豆 之叵夫 可比 鼻毗之毗之尔 志可登阿良農 比宜可伎撫而 安礼乎於伎 旦 人者安良自等 富己呂倍騰 寒之安礼婆 麻被 引可賀布 利 布可多衣 安里能許等其等 伎曾倍騰毛 寒夜須良乎 和 礼欲利母 貧人乃 父母波 飢寒良牟 妻子等波 乞と泣良牟 此時者 伊可尔之都と可 汝代者和多流 天地者 比呂之等伊倍杆 安我多米波 狭也奈里奴流 日月波 安可之等伊倍騰 安我多米波 照哉多麻波奴 人皆可 吾耳也之 可流 和久良婆尔 比等と波安流乎 比等奈美尔 安礼母作乎 綿毛奈伎 布可多衣乃 美留乃其等 和と氣佐我礼流 可と布 能尾 肩尔打懸 布勢伊保能 麻宜伊保乃内尔 直土尔 蒙解敷 而 父母波 枕乃可多尔 妻子等母波 足乃方尔 困居而 憂 吟 可麻度柔播 火氣布伎多豆受 許之伎尔波 久毛能須 可伎豆 飯炊 事毛和須礼提 奴延烏乃 能杆与比居尔 伊等 乃伎提 短物乎 端伎流等 云之如 楚取 五十戸良我許 惠波 寝屋度麻豆 来立呼比奴 可久婆可里 須部奈伎物能可 世間乃道 世間乎 宇之等夜佐之等 於母倍杆母 飛立可祢都 烏尔之安良 祢婆	山上憶良頓首謹上。

*1 原文と現代語訳は、小島憲之・木下正俊・東野治之 校注・訳『萬葉集② 巻第五～巻第九』小学館 2002年 pp.70-72を引用した。ただし、一部分は中学生用に倉橋が修正した。

貧窮問答の歌一首と短歌

(問歌)

風に交じって 雨が降る晩 雨に交じ
 雪の降る晩 どうしようもないほ
 ど 寒いので ① 堅塩を 少しずつま
 んで口に入れ ② 糟湯酒を ちびちびす
 すって 咳き込んで 鼻水をすすり
 ろくに生えてもいない ひげを掻き撫で
 ては おれほどの 人物はあるまいと
 反り返ってはみるが 寒いので 麻の夜
 具を 引きかぶって 粗末な肩衣など
 あるもの全部 着重ねても 寒い晩だの
 に
 わたしよりも 貧しい人の 父母は
 飢え寒がっていよう 妻や子は何か下さ
 れと泣いていよう こんな時は どんな
 にして おまえは世を渡っているか。

(答歌)

天地は 広いというが わたしには 狭くなったのか 日月
 は 明るいというが わたしには 照ってくださらぬのか 人
 皆こうなのか わたしだけこうなのか。
 ③ 運良く 人に生れて 人並みに ④ 五根も健全ではあるが
 綿もない 粗末な肩衣の ⑤ 海松のように 裂けて下がった
 ぼろだけを 肩に掛け ⑥ 伏せ廬の 曲げ廬の内に 地べたに
 藁を敷き敷き 父母は 私の枕の方に 妻や子は私の足下
 の方に 身を寄せ合って寝て ぼやいてうめき声をあげている。
 かまどには 煙も出ていないし ⑦ こしきには 蜘蛛が巣を
 つくり 米を蒸す 方法も忘れて ぬえ鳥のように ぼそぼそ
 とものを言っている時に それでなくても 短い物を切り縮め
 ると ⑧ いう諺のように 鞭を持つ 里長めの声は 寢床まで
 来てわめき立てる。こんなにも 辛く苦しいものか 世の中
 の道理というものは。
 (反歌)
 世の中は いやなものだ消え入りたいと 思うけれど さて
 飛び去ることもできない 鳥ではないので
 山上憶良 ⑧ 頓首し謹んで献上します。

- ① 堅塩：精製されていない、不純物の多い塩。色も黒く、塊になっていて堅かった。
 ② 糟湯酒：濁り酒を布類でこして清酒を造る際の残り滓である酒かすを湯で溶かした飲み物。
 ③ 運良く人に生まれ：人として生まれることは、めったにない、このうえない幸福である。(仏教)
 ④ 五根：『涅槃經』で言う、悟りを得るために必要な信・勤・念・定・慧の5つの精神的な能力。
 ⑤ 海松：濃緑色の海藻。松の枝のようにも見えるので海松と書く。
 ⑥ 伏せ廬：屋根を地面まで葺いた、地上に伏せたような形の堅穴式半地下構造の住居。
 ⑦ こしき：米を蒸すためのかわら製あるいは木製の蒸し器。
 ⑧ 頓首：中国の礼式で、頭で地を叩き、また頭を地につけて敬意を表すこと。(広辞苑より)